

主論文の要約

(Abstract of Dissertation)

論文題目(Title) : モンゴルの社会主義時代における政治的粛清の記憶—東北部ヘンティイ県を中心に—(The Memories of Political Repressions in Mongolia: Focusing on Khentii Aimag in Northeastern Mongolia)

氏名 : DOLGOR Delgermaa

論文内容の要約 :

本論文では、モンゴル社会主義時代の1920-1980年代の間に行われ、計36,000人余が犠牲となった政治的粛清がどのようにモンゴルで記憶されてきたのかを、とくに東北部ヘンティイ県に焦点を当てて考察した。1990年代以降、モンゴルにおいて政治的粛清の歴史は犠牲者に対する補償の動きとともに研究されてきたが、モンゴル国外では研究があまり進んでおらず、政治的粛清が大規模に行われた事実も十分に知られていない。とくに従来の研究では政治家や著名人の犠牲が多く取り上げられ、一般人の犠牲者やその遺族の声はあまり検討されてこなかった。一方、今日の歴史研究では国民や一般民衆の集合的記憶の生成に注目した「記憶の歴史学」のアプローチが見られる。しかしモンゴルではこのような記憶論を参照した歴史研究、とくに政治的粛清を検討した研究はほとんどない。そのため、本論文では、現地調査で収集したモンゴル語史料、インタビューと参与観察記録のほか、一般人のオーラル・ヒストリーを分析し、モンゴル現代史における政治的粛清とその記憶や記念のあり方を検討した。

本研究は序論、第1章から第4章、そして結論から成る。

第1章では、まず先行研究について整理し、その内容を考察した。モンゴルにおける政治的粛清は従来、①1920-40年代、②1950-80年代、の両時期に分けられ、大量の犠牲者を出した1930年代の「大粛清」が主に研究されてきた。次に、当時の政治的粛清が起きたモンゴル国内外の要因について概観した。日露戦争後、ロシアにとって地政的に重要な位置を占め、新興国日本に対する極東の防御壁となったのがモンゴルであった。1921年に宣言した独立を維持するために、モンゴルはソ連の支援を受け、政治や経済など様々な面でソ連共産党・コミンテルンの影響を受けるようになった。それをめぐってモンゴル国内では革命家や政治家が対立し、かえってソ連の介入と勢力拡大を促すことになったのである。ソ連に対する反対派の一部は「反革命分子」、「階級の敵」とされ、粛清が始まった。さらに1932年の満洲国成立は粛清が激化する大きな要因となり、スターリンの指示のもと、チョイバルサンによって「日本のスパイ」といった疑いで数多くの粛清が実行された。

1920-1940年代の政治的粛清の対象者は、各層のモンゴル人であった。マルクス・レーニン主義から封建階級とされていた王侯貴族とラマ・僧侶たちのほか、「汎モンゴル」主義者やソ連のみでなく欧米の国々との交流も深めて資本主義の道を開こうとしたモンゴルの革命指導者や政治家、1920年代初頭にロシアからモンゴルに避難したブリヤード族も犠牲となった。従来、モンゴルにおける政治的粛清の責任は国内的文脈で問われてきたが、実際はソ連や中国、日本などの周辺諸国による影響が強く、とくに当時のソ連と日本の勢力圏拡大をめぐる対立が主な背景にあったことを論じた。

第2章では、政治的粛清の主な舞台となったヘンティイ県に焦点をあてることによって、1930年代の大粛清を地域レベルでより詳細に考察した。まず、ヘンティイ県は①チンギス・ハーンの故郷として、その子孫である王侯貴族・タイジが全国の中で最も多く、②僧侶や仏教徒も歴史的に多い土地柄であり、③北部がロシアと国境を接しているためブリヤード人が多く移住した、という特徴があり、これらが粛清の舞台となる大きな要因となったことを指摘した。

そのうえで、本章では現地調査によるインタビューとオーラル・ヒストリーを分析し、大粛清をめ

ぐる一般の人々の記憶を分析した。ヘンティー県出身の遺族のインタビューからは、粛清された当事者のみでなく、その家族や子どもも社会的に大きな犠牲を強いられ、粛清が未だに忘れがたい記憶であることが明らかになった。歴史家のD.ウルジーバートルが述べたように、モンゴルでの政治的粛清は人を民族や信仰、社会的地位、思想によって迫害した大虐殺であった。遺族の多くは、社会主義時代に逮捕された父親や叔父が生きっていると信じていたが、1990年の民主化以降の名誉回復作業で、逮捕直後に処刑されたり禁固中に亡くなったことを知らされた。社会主義期には、政治的粛清についてほぼ沈黙を強いられたが、個人的記憶に強く記録され、保持されていたことがわかる。

第3章では、1950-1980年代のモンゴルで行われた政治的粛清とヘンティー県の事例を検討した。1956年に開かれたソ連共産党第20回大会は当時の共産圏諸国に大きな影響を及ぼした。スターリンの死後、最高指導者となったフルシチョフは、同大会において個人崇拜の弊害を除去すべきことと、今後「集団指導体制」を推進するよう指示した。同大会を機にモンゴルでは指導部内の対立が深まった。しかし、首相のツェデンバルは、1984年に辞任するまで自分やチョイバルサン元帥を批判する者を解任、追放などの形で排除した。ソ連では、政治的粛清が主にスターリン時代、つまり1930-1953年に行われたとされるが、モンゴルでは1980年代末まで続いた。このようにモンゴルで粛清が長期化した理由は、ソ連の影響下で反対勢力を封じ込めるために社会主義体制による独裁政権が強化されたからと考えられる。

1950-1980年代のモンゴルにおける政治的粛清は、革命直後の1920-1940年代に行われた死刑や銃殺等ではなく、長期禁固、解任・解雇、追放等であった。この時期にも、モンゴルの政治家、知識人たちが主に粛清され、約400人余が犠牲になり、また彼らの家族や親族、同僚や友人も粛清の被害者になった。ヘンティー県では、当時の政権を批判した政治家や地元のチンギス・ハーンの記念行事に関わった知識人等が犠牲となった。他方、この時期には1920-1940年代の粛清の一部が真相解明され名誉回復されたが、モンゴル人民革命党の党員のみに限られ、僧侶や王侯貴族・タイジ、一般人は対象とされなかった。そのため当時、戦前の粛清は人々が幅広く共有する集合的記憶とはならず、党レベルに限られた。また1950年代以降、新たに行われた政治的粛清は、恐怖政治の下で沈黙を強いられ、個人的記憶として記録され保持されていった。

1950-1980年代の特徴は、1920-1940年代の粛清に比べて被害者の回想がより多く残され、まだ存命している体験者がいることである。そのため、過去の政治的粛清を社会状況が変わった今日、どう振り返り、どのように記憶しているかを当事者の視点から把握しやすい。彼らのインタビューやオーラル・ヒストリーからは、民主主義になって何よりも自分の意思を自由に語れるようになり、言論の自由を得たことを高く評価していることがわかる。

第4章では、民主化以後の現在のモンゴルにおいて政治的粛清はどのように記念され、その記憶がどうやって継承されてきたのかを考察した。モンゴルで民主化運動が起こり、1990年3月に勝利すると、長年続いた政治的粛清が個人から政府レベルで問い直されるようになった。1990年12月には初代大統領の令で名誉回復管理国家委員会が組織され、被粛清者の名誉回復や、被粛清者とその家族に対する支援・補償金支給政策に着手した。名誉回復国家委員会付属研究センターとともに各地方自治体に支部も設置され、1930年代に大量虐殺が行われたとされる跡地に慰霊碑も建てられた。1996年には初の民主党政権が成立し、9月10日には国家レベルでの政治的被粛清者追悼式とともにモンゴル政府が公式謝罪し、政治的被粛清者記念館も設立された。また、1997年には政治的被粛清者記念碑が建立され、翌98年に「被粛清者の名誉回復・補償に関する法律」も制定された。このように、1990年代には社会主義時代に沈黙していた政治的粛清の個人的記憶が次第に想起され、初めて集合的記憶として国民の間に共有されていった。

一方、ヘンティー県では、チンギス市において1991年に全国で初めて被粛清者の遺族による「被粛清者支援同盟」が設立され、1992年という早い時期から県レベルの追悼式が開催された。そして全国の中で先駆けて、もっとも多く被粛清者がヘンティー県で名誉回復されたのである。その背景には、政治的粛清の主な舞台となった記憶が一般の人々の間に強く残っていたためと考えられる。

政治的粛清の時代は以上のような慰霊碑、記念碑、追悼式、記念館などを通じて想起・記憶され、また中学や高校の歴史教育カリキュラムや小説、劇、映画などの大衆文化でも取り上げられるようになった。被粛清者の追悼式がモンゴル各地で開催され、記念碑や慰霊碑が次々と建立された。

1998年に制定された「政治的被粛清者の名誉回復・補償に関する法」はその後、数度にわたる改正

を経て、2018年に最終改正が決定された。同改正案の実施は2020年12月をもって終了するが、名誉回復のための被害届申請とともに、被粛清者やその妻（夫）、子供に対して2回目の補償金支給が行われている。政治的粛清によって犠牲となった計36,000人余のうち、現在名誉回復されているのは31,226人である。

結論では、各章での検討を通じて、これまでのモンゴルにおける政治的粛清をめぐる記憶の変容過程をまとめ、今後も記憶を継承していくうえでの課題を示した。戦前と戦後の政治的粛清は、社会主義時代に個人的記憶として人々の間で記銘・保持され、1990年以降にはナショナルな公的記憶、またはヘンティー県のローカルな記憶として想起されるに至った。つまり沈黙を強いられても、個人の記憶に記銘・保持された政治的粛清は完全に忘却されることなく、時代と環境の変化によって集合的記憶として広く共有されてきたことがわかる。

本論で示したように、激動の時代を経てきた現代モンゴルの歩みは複雑であり、従来「加害者」とされていた国家指導者に対するモンゴル国民の見解も時代とともに移り変わってきた。とりわけ国民の多大な犠牲を払った政治的粛清は、モンゴルの現代史を振り返るうえで重要なテーマであり続けている。しかし、民主化の影響で想起された政治的粛清の記憶は、今日、関連法の停止、また粛清を実際に経験した当事者やその子供世代の高齢化・他界などによって再び忘却されかねない。犠牲となった人々と社会主義時代を振り返り、歴史的時間の流れの中で風化しないように集合的記憶を後世に共有し、継承していくことが重要である。